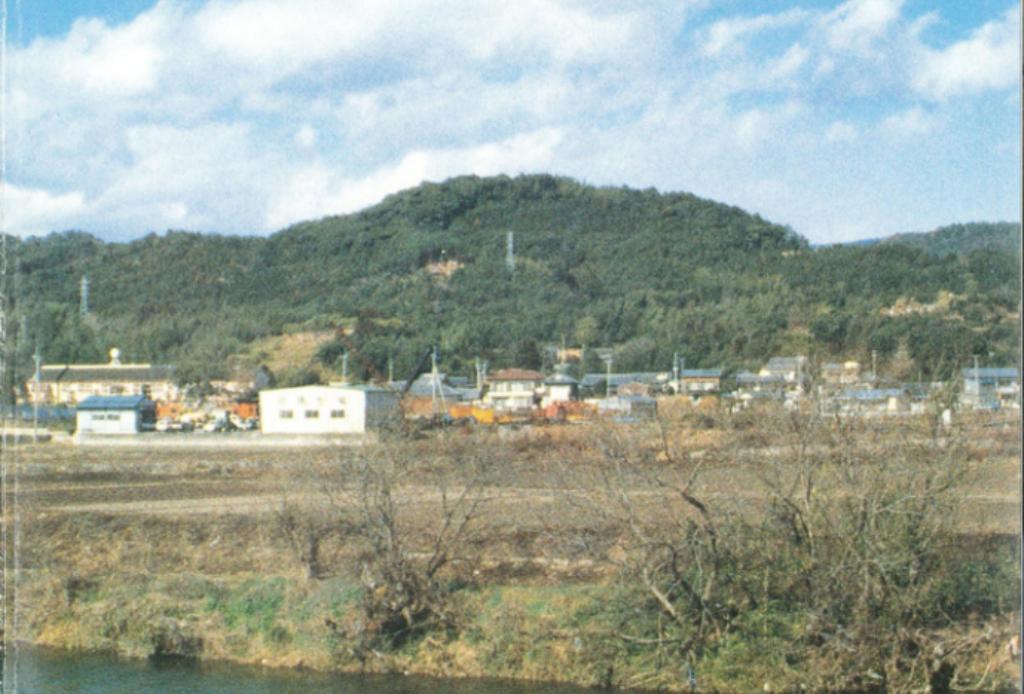


南国市埋蔵文化財調査報告書第8集

高知県南国市

# 蔵本2号墳

——送電線鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——



1989年3月

南国市教育委員会

# 藏本2号墳

—送電線鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1989年3月

南国市教育委員会

## 序

近年、南国市においても開発の波が押しよせ、数多くの埋蔵文化財が発掘調査され、貴重な成果をあげています。また、南国市は土佐山田町とともに県内における古墳の密集地帯であり、過去にも多くの古墳が調査されています。

本古墳の位置する岡豊町には、小蓮古墳、藏本古墳、米内古墳、舟岩古墳群、さらには岡豊城跡、その東方には土佐國分寺跡、土佐國府跡、比江庵寺などの高知県を代表する重要な遺跡を望むことができ、土佐のまほろばと言うにまさにふさわしい、歴史的環境をみせています。

本古墳は、送電線鉄塔の建替工事中に発見されたものであり、遺跡台帳には未登録の未知の古墳でした。工事中における発見のため、緊急調査として制約の多い調査ではありましたが、横穴式石室を検出し、無事に終了することができました。今回の調査により、高知県における後期古墳の姿の一端を知ることができ、さらに資料を加えることができました。

本書の刊行により、県内はもとより、広く古墳文化研究の一助になれば幸いと存じます。

また、本古墳の発掘調査と報告書作成にあたり、ご協力をいただいた関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成元年3月31日

南国市教育委員会

教育長 鈴 江 廣 幸

## 例　　言

- 1 本書は、送電線（新改線）29号鉄塔建替工事に伴う藪本2号墳の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本古墳は、鉄塔建替工事中に確認された新発見の古墳であり、その名称は所在地である南国市岡豊町八幡字藪本をとり、すでに周知の古墳（藪本古墳）が1基あるところから藪本2号墳と呼称することとした。
- 3 発掘調査は、事業主体者である四国電力の依頼を受け、南国市教育委員会が調査主体となり、昭和63年1月12日から1月23日まで実施した。また、整理作業、報告書作成は昭和63年度に行った。
- 4 発掘調査、整理作業は、南国市教育委員会の依頼を受け、高知県教育委員会文化振興課主任森田尚宏が担当した。本書の執筆、編集は森田が行った。  
調査の事務、総括は、南国市教育委員会社会教育課主任浜田清貴が行った。
- 5 本書に使用した標高は鉄塔基準点（No.29）を基準とした海拔高である。また、図中の方位はすべて磁北である。
- 6 古墳周辺の地形図（第2・3図）は四国電力の提供を受けた。また、第4図は建設省国土地理院発行1/50,000地形図「高知」（昭和61年3月30日発行）を複製したものである。
- 7 調査にあたっては、四国電力株式会社の御理解、御協力を得て、現地では重機等の提供を受けるとともに、調査後の保存処置を行っていただいた。また、発掘調査、整理作業にあたっては小松幹典、小松幹明の協力を得た。記して感謝する次第である。
- 8 出土遺物等は南国市教育委員会において保管している。

## 本文目次

第1章 調査の経緯	
1 調査の契機	1
2 調査の経過	2
第2章 遺跡の環境	
1 位置	6
2 歴史的環境	6
第3章 調査結果	
1 遺構	10
2 遺物	16
第4章 まとめ	17

## 挿図目次

第1図 古墳位置図
第2図 古墳周辺地形図
第3図 トレンチ設定図
第4図 周辺遺跡分布図
第5図 石室検出・Aトレンチ西壁セクション図
第6図 調査区遺構平面図
第7図 石室・Bトレンチ西壁セクション図
第8図 石室実測図
第9図 出土遺物(1須恵器杯・2勾玉・3土玉)

## 表目次

第1表 周辺古墳一覧表
第2表 県内古墳一覧表

## 図版目次

図版1 遠景（南より）	遠景（南東より）
図版2 近景（南より）	古墳からの遠景（北より）
図版3 調査前全景（北より）	調査前全景（西より）
図版4 Aトレンチ古墳検出状態	石室上面検出状態
図版5 奥壁裏面検出状態	石室上面検出状態
図版6 石室検出状態（南より）	石室検出状態（西より）
図版7 床面上面	第1床面
図版8 奥壁	南側壁
図版9 北側壁	第1床面断面
図版10 第1床面断面	第2床面
図版11 奥壁	南側壁
図版12 北側壁	完掘状態（北西より）
図版13 完掘状態（南東より）	石室完掘状態（北西より）
図版14 石室掘方及び石材抜取痕	試掘トレンチ東壁セクション
図版15 北側壁掘方	北側壁掘方セクション
図版16 墳丘西部断面	墳丘西部土師器出土状態
図版17 墳丘南部Bトレンチ	墳丘南部Bトレンチ東壁セクション
図版18 Bトレンチ石積み	Bトレンチ掘方
図版19 砂による埋戻し（北より）	砂による埋戻し（南より）
図版20 調査風景	調査風景
図版21 出土遺物（勾玉・土玉・須恵器杯）	出土遺物（土師器）

# 第1章 調査の経緯

## 1 検査の契機

本古墳の所在する南国市岡豊町は、高知県の中央部、県下最大の平野部である高知平野の北部、四国山地が平野部に接する地域に位置しており、四国の霸者である長宗我部氏の居城として著名である岡豊城跡をはじめとして、土佐の三大古墳の一つである小蓮古墳や舟岩古墳群などの遺跡が所在している。

今回、検査を行った藏本2号墳が位置するのは、岡豊城跡の所在する岡豊山の北向いの山麓南斜面であり、検査の契機となった送電線（新改線）もこの斜面を東西に走っている。四国電力による新改線の鉄塔建設計画はNo.28～31の4基であったが、その建設位置には周知の遺跡の存在は確認されておらず、計画段階では埋蔵文化財にかかる協議等は行われていなかった。しかしながら、鉄塔の位置する南斜面の裾部には藏本古墳の存在が知られており、さらに、北方につらなる山腹部には舟岩古墳群が位置しているところから、当該工事計画地内にも古墳等の遺跡が存在する可能性が考えられた。そのために工事計画の情報入手とともに四国電力へ連絡をとった結果、工事着手時に立会を行い、遺跡所在の有無を確認することとし、遺跡の存在が確認された場合には別途協議を行うこととなった。

工事着手時における立会は、昭和62年12月20日に南国市教育委員会により行われた。No.29鉄塔の工事は、旧鉄塔の上方約25mの位置（標高66m前後の小尾根部）にA～Dの4脚の鉄塔基礎を建設するものであり、直径2.5mの工事用円形枠を設置するための掘削を行った。立会では出土遺物もみられず、遺構も確認されなかつたことから遺跡は存在しないと判断された。

しかし、立会後の掘削中に遺物が出土したとの連絡があり、急速現地へ赴いたところ、出土遺物は須恵器片であった。また、D脚の掘削中に多数の割石がみうけられ、堆土中から2点目の須恵器片を採集したことから、古墳が存在する可能性がきわめて強いと考えられ、確認のために試掘を実施することとなった。試掘トレンチは、A脚とD脚の間に存在する小墳丘状の



第1図 古墳位置図

中央部に設定し、掘り下げた結果、古墳の石室奥壁の裏面側を検出し、古墳の存在が判明した。D脚の掘削はほぼ終了しており、他の部分は掘削しないとのことであったが、古墳の規模、遺残状態を確認し、今後の工事による影響を最小限におさえるために緊急調査を実施することとなった。

## 2 調査の経過

試掘トレンチによる調査の結果、古墳の存在が明らかとなつたが、工事は脚部部分の掘削以外は現状で残るものであり、古墳に多大な影響をあたえるものではなかつたが、古墳の範囲、規模を確認するために、昭和63年1月12日から1月23日にかけて緊急調査を実施した。

現地は、標高66～67mを測る南斜面の中腹であり、南東へ小さく張り出した小尾根の端部である。標高67mのライン上には、小さな平垣部が存在しており、その端部に直径約2.5mほどの小さな墳丘状の盛り上がりがみられ、尾根の先端方向へ約1.5mほど傾斜を強め落ちた後に、再び緩傾斜面が存在する。D脚は小尾根の西へやや下った斜面に位置しており、小尾根の中央部ではないことから、掘削中に出土した割石は石室を構築する石材ではなく、墳丘造成時に使用された割石ではないかと考えられ、石室は小墳丘状の位置する小尾根中央部とみられた。そのため試掘トレンチは小尾根端部中央に設定した。

試掘トレンチ（Aトレンチ）は、幅1m、長さ3.5mであり、地表下約1.5mまで掘り下げ地山を確認したが、出土遺物もなく、当初の段階では明確な遺構は検出されなかつた。しかし、地山面の一部に不明瞭な掘り込みがみられたので精査した結果、トレンチの西壁に3段の石積みを確認した。検出状況からは石室奥壁の裏面を掘り込んでいると考えられたので、調査は試掘トレンチから西の部分を中心に行うこととした。なお、地山面上の掘り込みは、調査の結果、石材の抜き取り痕及び石室構築のための掘り方であることが判明している。

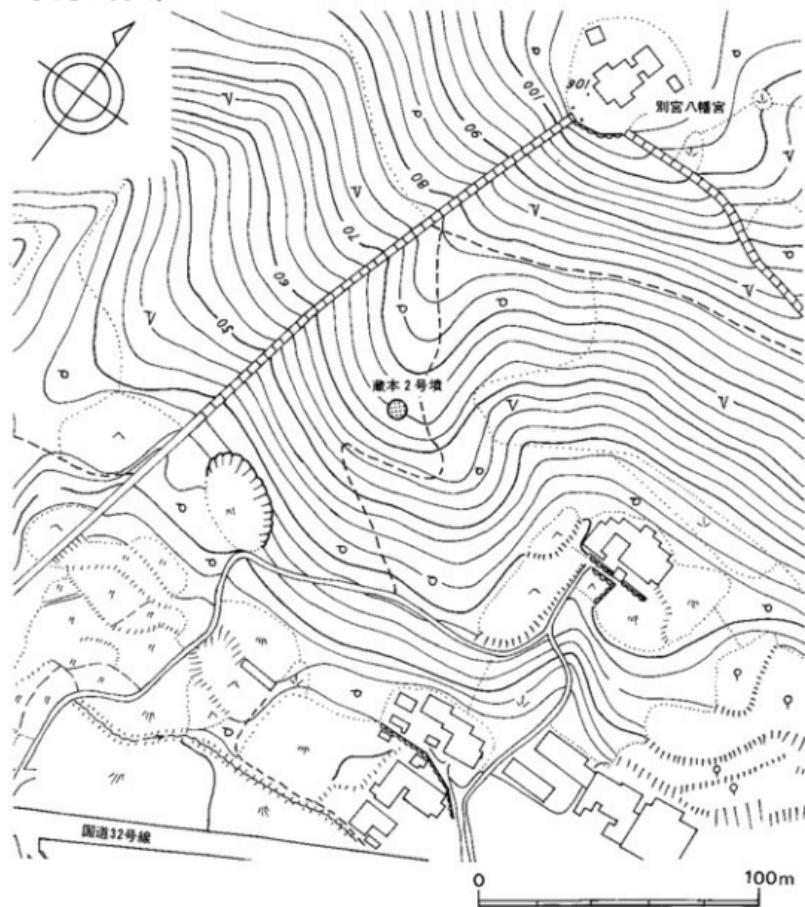
試掘トレンチから西部、D脚との間にを中心に表土を下げる段階で30～50cmの割石がコ形をなし、集中的に検出されたので、古墳の存在が確実となった。以後、石室を中心にして調査を進めた結果、石室はD脚の掘削によりほとんど破壊されており、奥壁から1.2mほどが残されていることが判明した。石室の検出状態は、側壁、奥壁ともに2～3段の石積みを残すのみであり、上部はすでに崩壊しており、石室の前方部も同様とみられ、山腹の小尾根斜面部という立地からみて、当初よりかなり崩壊していた古墳であったと考えられる。

石室の南東部が小尾根の先端部にあたり、標高65mの平垣部にかけての急斜面に対し、墳丘確認のために石室に直交するトレンチ（Bトレンチ）を設定した。Bトレンチは、幅0.8m、長さ2mを測り、地表下約0.5m掘り下げた面で石室側への掘り込みと掘り込み中に割石がみられた。また、側部側でも緩やかな地山の掘り込みが検出された。石室の南では、検出面において西方（石室の開口方向）に向けて延びる列石が検出されたので、その前方部を確認するために拡張した。その結果、一群の割石及び石室側への地山掘り込みのコーナー部が検出され、Bトレンチにおいて検出された掘り込みに続くものではないかとみられた。さらに、拡張区の西に遺構確認のためにCトレンチ（幅0.6m、長さ2.5m）を設定し、掘り下げたが、すでに地山面まで掘削の廃土等により擾乱されており、遺構、遺物は検出されなかつた。

今回の調査では、すでに工事が開始されており、また、鉄塔の基礎部ということで強度上の問題から周辺部の掘削は極力さけてほしいとの電力局の意向もあり、石室を中心とした部分及

びB・Cトレンチのみの調査であり、古墳の周辺施設、墳丘、石室の全容については十分な結果を得ることはできなかったが、工事中の発見という悪条件のもとで確認され、調査を行うことができたのは幸いであった。

また、古墳の調査終了後の処置としては、保存のために石室及びBトレンチについて砂による埋戻しを行い、さらに、工事終了時には、盛土により原形に復し、芝張りを行い周囲にフェンスを設置した。古墳の保存については、四国電力の全面的な協力を得ることによって実施することができた。

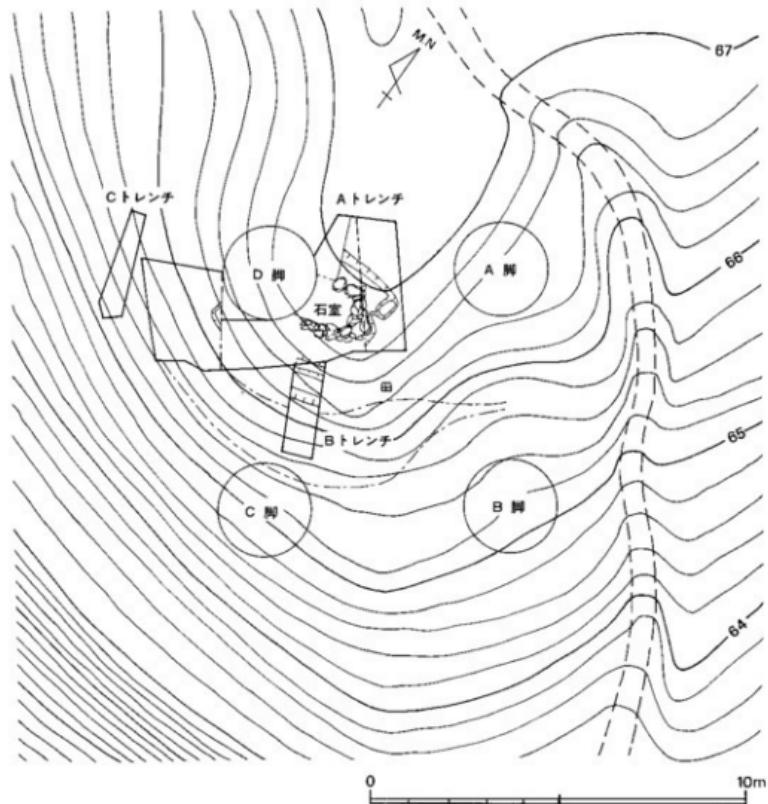


第2図 古墳周辺地形図 ( $S = 1/2,000$ )

なお、古墳の測量にあたってはNo.29鉄塔の基準杭を中心として、No.30鉄塔の基準杭方向を基準線とした座標を設定し、これによった。

#### 調査日誌抄

- 1月12日（火） 遺物出土の連絡あり。現状を調査した後に試掘を行い、古墳の存在を確認する。
- 1月13日（水） 古墳の存在が明らかとなったため緊急調査を開始する。石室の上面の割石を検出する。
- 1月14日（木） 石室内を掘り下げながら、上面の崩れた割石を除去する。



第3図 トレンチ設定図 ( $S = 1/150$ )

- 1月15日（金） 石室内の下げ床面上面の石敷を検出。実測後さらに下げる。
- 1月18日（月） 石室第1床面を検出。写真撮影、実測後半截し第2床面を確認する。また、墳丘確認のためにBトレンチを設定する。
- 1月19日（火） 石室第2床面を検出する。写真撮影、実測後床面構築を確認のため一部トレンチにて下げる。なお、第1床面下より勾玉及び土玉を出土する。Bトレンチでは地山掘り込み及び集石を検出する。
- 1月20日（水） 石室北側を下げ、石室の構築状況及び墳丘の確認を行う。Bトレンチは写真撮影後、実測を行う。
- 1月21日（木） 石室西部を拡張し、地山掘り込み及び集石を検出する。地山掘り込みの埋土中より土師器壺片を出土する。
- 1月22日（金） Cトレンチを設定し調査を行うが、遺構、遺物は検出されなかった。石室及び拡張区部分の写真撮影後、実測を行う。
- 1月23日（土） 石室及び各セクション等の実測を行い、調査を終了する。
- 2月17日（水） 砂により石室、Bトレンチ、拡張区の埋戻しを行う。

## 第2章 遺跡の環境

### 1 位置

歳本2号墳は、南国市岡豊町八幡に所在している。南国市は高知県のほぼ中央部に位置しており、県内最大の平野である高知平野の大部分を占めており、近隣の土佐山田町、野市町などとともに遺跡の最も集中する地域である。地形的には、南に太平洋を望み、東は物部川を境界として野市町、吉川村に接し、北には土佐山田町、西には高知市が位置する。市域の南半部は平野部であり、北半部は四国山地の山麓部となっており、平野部は水田の広がる農業地帯であるが、近年では各種の開発が急速に進んでいる。

地質的にみれば、北部の山間部は、中央構造線の南に広がる外帯に属しており、北から南へと地層の形成がなされている。平野部には、吾岡山、船岡山、陣山、三畠山、坂折山、高間ヶ原山、鉢伏山、岡豊山などの標高100m前後の独立丘陵が点在しており、ペルム紀の高岡層、虚空蔵山層からなっている。平野部の南部は物部川の新期扇状地と三角州からなる沖積平野であり、北部には物部川の古期扇状地である長岡台地が東西方向に存在しており、さらにその北部には国分川の堆積による沖積平野が広がっている。

当古墳の立地する位置は、四国山地が平野部に没する山麓部であり、南には岡豊山が存在し、眼下には国分川が流れ、高知平野から太平洋にかけての眺望が広がっており、古墳の立地条件としては良好といえる。

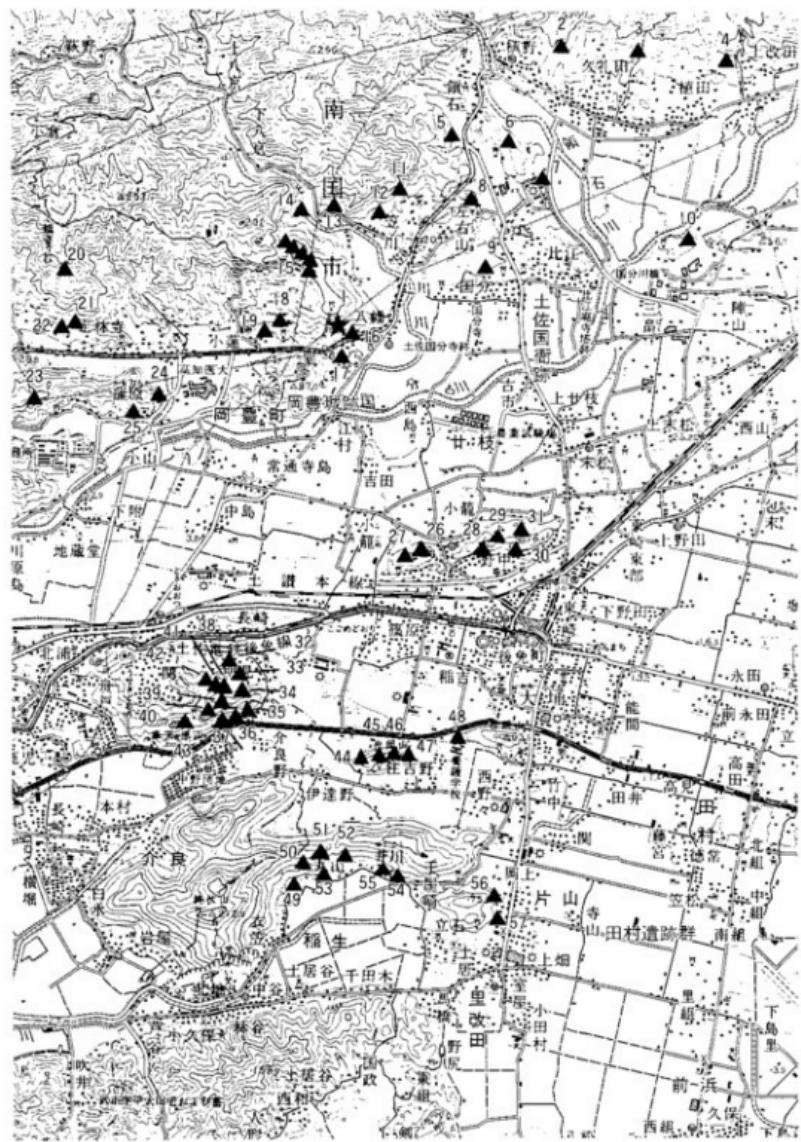
### 2 歴史的環境

南国市は物部川、国分川により形成された沖積平野である高知平野の大半を占めているところから遺跡の密度も高く、各時代の遺跡の所在が知られており、近世以前は土佐の中心地として栄えた地域である。

先土器時代の遺跡は市域には存在しないが、南国市との境界線上に位置する高知市の高岡原1号墳の玄室床面からチャート製の細石刃石核が1点出土しており、混入ではあるが現在のところ高知平野における唯一の先土器時代の遺物である。

縄文時代の遺跡は少なく、後期の遺跡が大半を占めている。山麓部の遺跡では岡豊町定林寺に栄エ田遺跡が所在しており、南の平野部では田村遺跡群のLoc.47において包含層が発見されているがいずれも後期である。また、田村遺跡群の北に位置する西見当遺跡では若干の晩期の遺物が出土している。さらに単独出土ではあるが国分西熊野神社東裏及び十市栗山峯山からは磨製石斧が発見されており、遺跡の所在が考えられる。

弥生時代の遺跡の存在は数多く知られている。中でも田村遺跡群では前期初頭の集落跡と水田址が検出されており、高知県における弥生文化成立の過程をうかがい知ることができる。さらに中～後期にかけての集落跡も確認されており、高知平野における拠点的集落であったと考えられる。



第4図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺古墳一覧表

番号	名 称	備 考	番号	名 称	備 考
1	藏本2号墳	発掘調査 一部保存	30	年越山2号墳	消滅
2	中山田古墳	一部残存	31	年越山古墳	不明
3	高松古墳	発掘調査 消滅	32	明見彦山3号墳	現存
4	城ヶ谷1、2、3号墳	消滅	33	明見彦山2号墳	消滅
5	ロミノヲ谷古墳	発掘調査 消滅	34	明見彦山1号墳	現存
6	笠原古墳	現存 未調査	35	猩岩1号墳	消滅
7	鷹ノ骨1、2号墳	消滅	36	猩岩2号墳	"
8	左右山古墳	"	37	猩岩3号墳	"
9	大塚古墳	現存 未調査	38	三ツ塚上古墳	不明
10	三島古墳	"	39	三ツ塚下古墳	現存
11	土家古墳	"	40	三ツ塚中古墳	不明
12	長原古墳	"	41	小奈路古墳	石室現存
13	柳が首古墳	消滅	42	六郎山古墳	不明
14	瀬戸古墳群	石室現存 未調査	43	高間原古墳群	一部発掘調査
15	舟岩古墳群	1~17号墳発掘調査 消滅	44	舟岡山2号墳	消滅
16	藏本1号墳	石室現存 未調査	45	舟岡山1号墳	"
17	米内古墳	石室一部 残存	46	舟岡山3号墳	現存
18	天神ノ前古墳	現存 未調査	47	舟岡山4号墳	消滅
19	小蓮古墳	発掘調査 現存	48	吾岡山1、2号墳	"
20	長敏古墳	石室現存 未調査	49	馬背西1号墳	現存 未調査
21	野津古3号墳	現存 未調査	50	丸山古墳	"
22	芝ノ前1号墳	現存	51	坂の松古墳	石室現存
23	蒲原山西古墳	"	52	馬背古墳	現存 未調査
24	蒲原山中古墳	"	53	馬背東1号墳	消滅
25	蒲原山東1、2号墳	発掘調査 消滅	54	井川山1号墳	現存 未調査
26	越戸1号墳	発掘調査	55	井川山2号墳	"
27	越戸2号墳	消滅	56	秋葉山南平古墳	現存
28	折越山古墳	不明	57	藤光古墳	一部現存
29	年越山古墳	消滅			

えられる。長岡台地を中心とした地域では、後期を中心とする遺跡の所在が確認されている。この中では高知農業高校校庭遺跡、三島遺跡が集落跡として確認されており、高知農業高校校庭遺跡は広範囲とみられ、北に位置する五軒屋敷遺跡もその範中に含まれると考えられる。両遺跡ともに時期的には、後期後半から終末であり、ヒビノキI・II式の土器を出土している。田村遺跡群では、この時期の遺構、遺物は非常に少なく、撲点的集落としての役目を終え、中心地は北部の長岡台地周辺に移動したようである。

市域からの青銅器の出土地は6ヶ所知られており、銅鐸3個、銅鐸舌1個、銅矛6本が出土している。銅鐸は、扁平錐銅鐸が大塙関町田と香美郡下（出土地不明）の2個が、また、突線錐銅鐸が田村正善より1個出土している。銅鐸の舌は田村西見当で出土しており、大塙関町田出土の銅鐸に材質が類似しているところから、この銅鐸の舌であった可能性が強いとされている。銅矛は、十市連倉から中広形銅矛1本、田村カリヤから広形銅矛5本が出土しているが、十市連倉の銅矛は昭和49年に発見されており、昭和50年には埋納壙の調査が行われている。このように南国市では銅鐸、銅矛とともに出土しており、県内の弥生文化の様相を知る上で重要な地域である。

古墳時代の遺跡としては、6～7世紀の横穴式石室をもつ古墳が北部の山麓部及び独立丘陵上に多数所在している。集落としては、土佐國府跡の発掘調査で6～7世紀の竪穴住居址が現在までに30棟前後検出されている他に、住居址が検出されている遺跡は少ない。また、4～5世紀における集落跡は五軒屋敷遺跡、三島遺跡等で住居址が発見されているが、当該時期の古墳は少なく、唯一、狭間古墳が5世紀代の古墳として調査されており、組合せ式木棺3基が検出されている。現在までに発見されている古墳はいずれも小規模なものが多いが、南国市域では小蓮古墳が石室全長10.8m、玄室幅2.1mを測り、県内でも大形の石室をもつ古墳といえる。これらの古墳の中心となる舟岩古墳群は26基からなる群集墳であり、さらに北部周辺の古墳群を含めれば52基を数える古墳の集中地帯である。また、南部の高間原古墳を広義にとらえれば25基となり、もう一方の集中地帯である。藏本2号墳も舟岩古墳群を広義にとらえればその範中に含まれる。

古代から中世においては、藏本2号墳の東方約2kmに土佐國府跡、土佐國分寺跡、比江庵寺跡などの遺跡が位置しており、奈良～平安時代を通じて土佐の中心地であり、鎌倉時代においても土佐國府跡の調査において13世紀の遺構、遺物が検出されているところから、やはり重要な地域であったと考えられる。室町時代には、南部の田村に守護代である細川氏の居城である田村城跡が所在しており、勢力の中心は南へ移動したものとみられる。戦国時代では各地に有力国人等の城館が所在するが、中でも勢力を拡大し、土佐、さらには四国を制覇した長宗我部氏の居城である岡豊城跡が、当古墳の南に位置しており、再び岡豊周辺が土佐の中心地となつたと考えられる。

## 第3章 調査結果

### 1 遺構

今回の調査で検出されたのは、横穴式石室を有する古墳一基である。調査前の状況については、第1章に述べたとおり古墳としての判断は難しく、工事中に古墳として確認されたものであった。以下に墳丘、内部主体について述べる。

#### 墳丘

墳丘は当初よりほとんど流失していたと考えられる。調査前にはわずかに小尾根上に直径2.3mほどの盛り上がりがみられたが、古墳の石室はやや東に位置しており、墳丘は現地形とほとんど差がなく、明確にすることはできなかった。調査の結果、石室自体も2～3段の石積みが残されているだけあり、石室崩壊後、墳丘を形成していた盛土は自然流失したものとみられる。

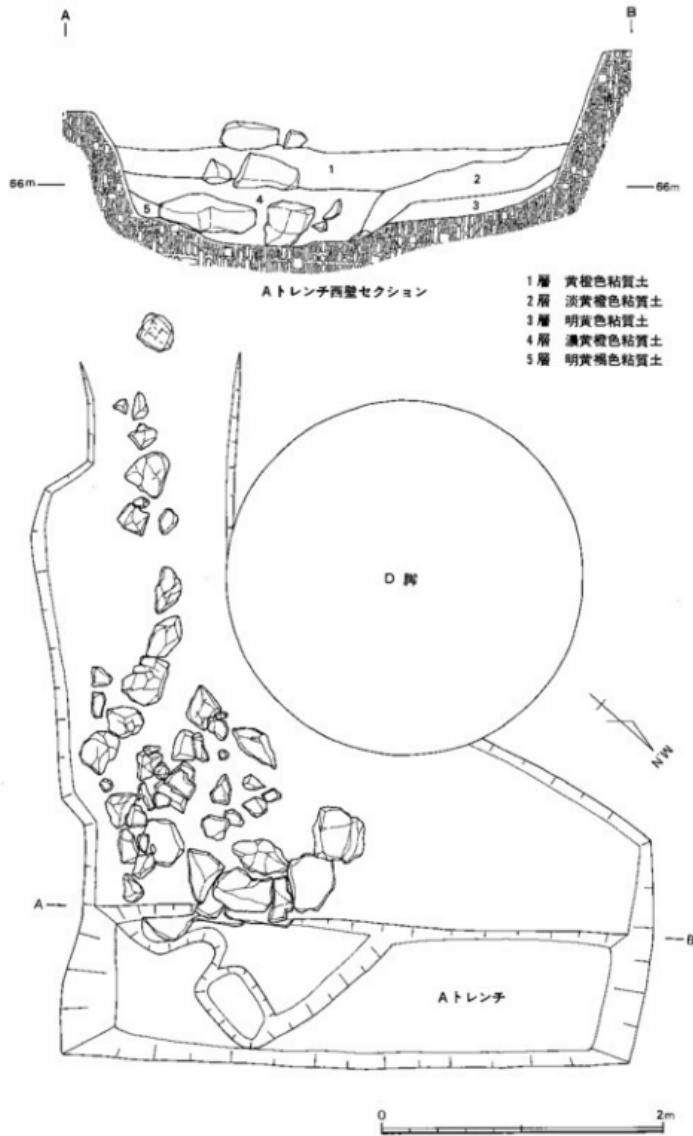
現況では墳丘と確認できる盛土はなかったが、Bトレンチのセクションからみれば、2・3層は地山の掘り方の上に盛られており、石室構築における埋土であると同時に墳丘を形成する盛土の最下部と考えられる。また、標高65～65.60mの間の等高線が開いており、緩やかな傾斜をみせているところから、墳丘の裾部は65.60mのラインにあたると想定される。石室を中心としてこのラインを追えば、直径約10mを測る円墳と推定されるが、北側では石室の掘り方の外は自然地形に続いている。墳丘を明確にする地山の削り出し等はみられず、斜面部に盛土を行った古墳であり、不整形の墳丘をもっていたと考えられる。また、盛土層である3層はよくしまっているが2層はしまりが悪く、Bトレンチの東壁セクションからみれば、2層は墳丘裾部へと流れている状態である。

なお、墳丘に伴う周溝等の付属施設の存在は確認されなかった。

#### 石室

今回、検出された内部主体は横穴式石室であった。しかし、工事中の発見であり、すでに奥壁側半分以上を破壊されていたために奥壁側約1mを残すのみであった。そのために羨道部及び玄門部の状態については不明であり、石室の形態も両袖式、片袖式、あるいは無袖式のいかなる形態をもっていたものか判断できないが、石室の幅から考えると無袖式の可能性が強いと思われる。石室の遺存状態としては、奥壁、側壁に使用されたとみられる30～50cm大の石材が落ち込んでいるところから、石室の大部分はすでに崩壊していたものと考えられ、あまり良好な遺存状態とはいえない。

石室の残存長は奥壁から約1mであり、西部の拡張区においても羨道部の存在を示すような遺構は検出されておらず、石室の推定全長は長くとも3.5m以内であろう。また、石室幅は約1mを測り、県内の横穴式石室の中でも小規模なものである。平面形は、先に述べたように無袖式の方形を呈するとみられ、石室高としては、現存する石積みが床面から70～80cmを測ることから、1.5～2.0mの推定高が考えられる。また、石室の開口方向は、石室の残存部の中軸線が

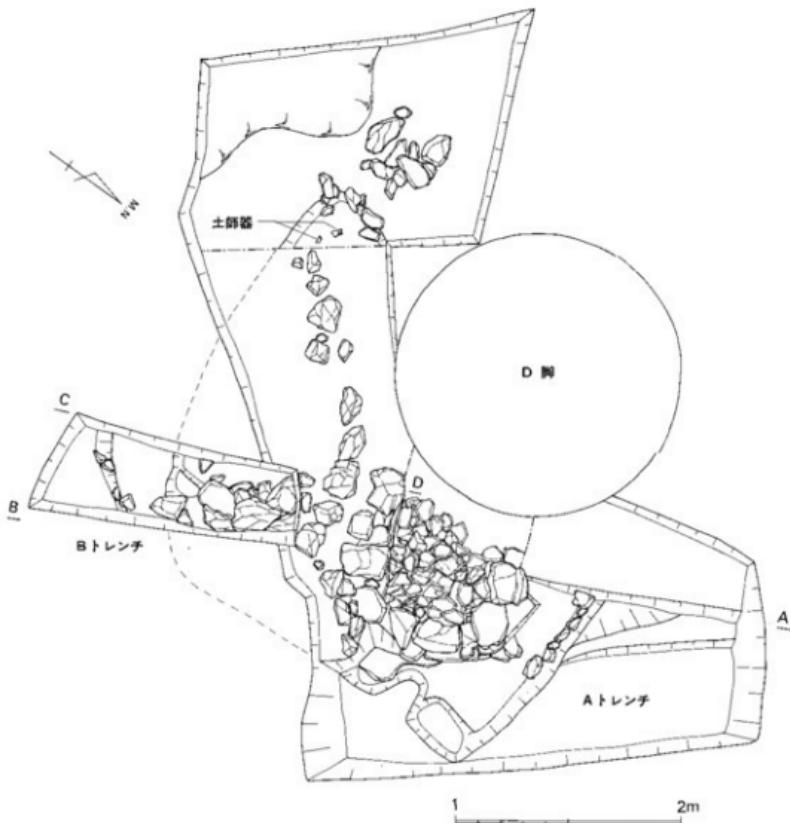


第5図 石室検出・A トレンチ西壁セクション図

N—114°—Wを測るところから、西南西とみられる。

奥壁には大小2個の基底石が使われており、幅65cm、高さ40cmを測る大形の基底石上には1段の石積み、幅25cm、高さ30cmの小形の基底石上には2段の石積みが残されている。石積みの上面は床面から80cmの高さを測る。2・3段目の石積みにはやや偏平な石材が使用されており、基底石に対し石室内へ内傾気味に小口積みとされている。また、平面的にみても側壁側から内湾気味の石積みとなっている。

北側壁には幅35cmと45cm、高さはいずれも30cmを測る2個の基底石が使用されており、各々2段の石積みが残されている。2段目の石材は高さ15cmとやや小形であり、3段目の石材は高

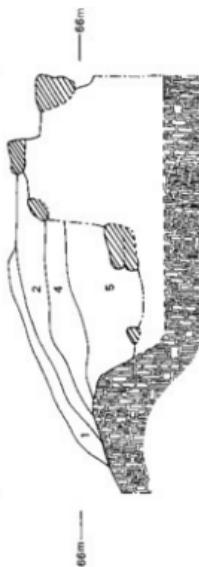


第6図 調査区造構平面図 ( $S = 1/50$ )

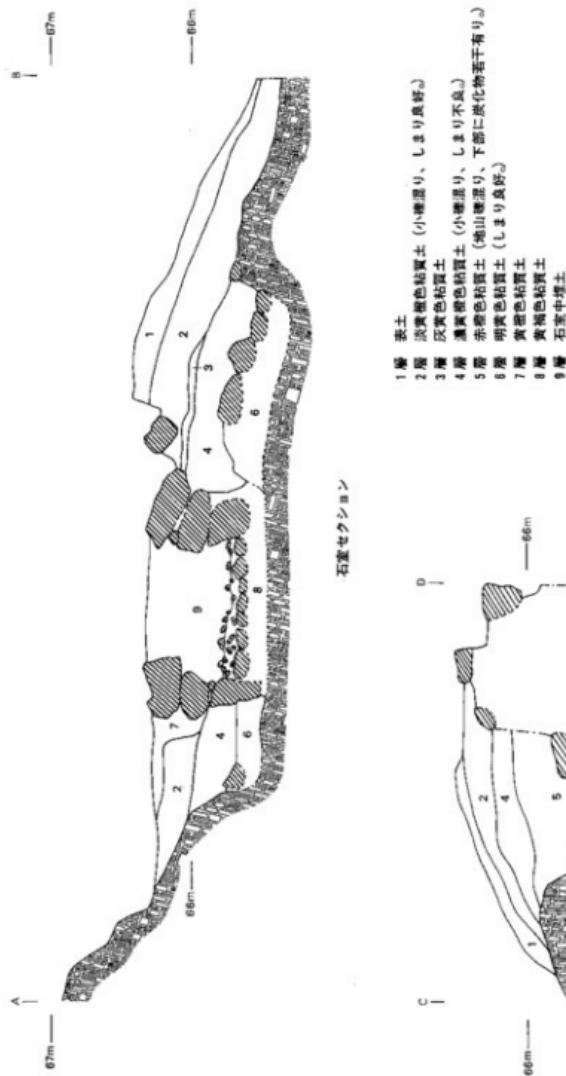
第7図 石室・Bトレント西壁セクション図 ( $S = 1 / 40$ )



日トレント西壁セクション



石室セクション



さ25~35cmを測り、全体的によくそろっている。石積みの上面は床面から75cmの高さを測る。基底石には偏平な石材を立てて使用しており、2・3段目は小口積みとされている。また、2・3段目は内傾気味に積まれ、石室内へ張り出しているところから、一部持ち送りがなされていた可能性もあるが、崩壊時における石材のずれとも考えられる。

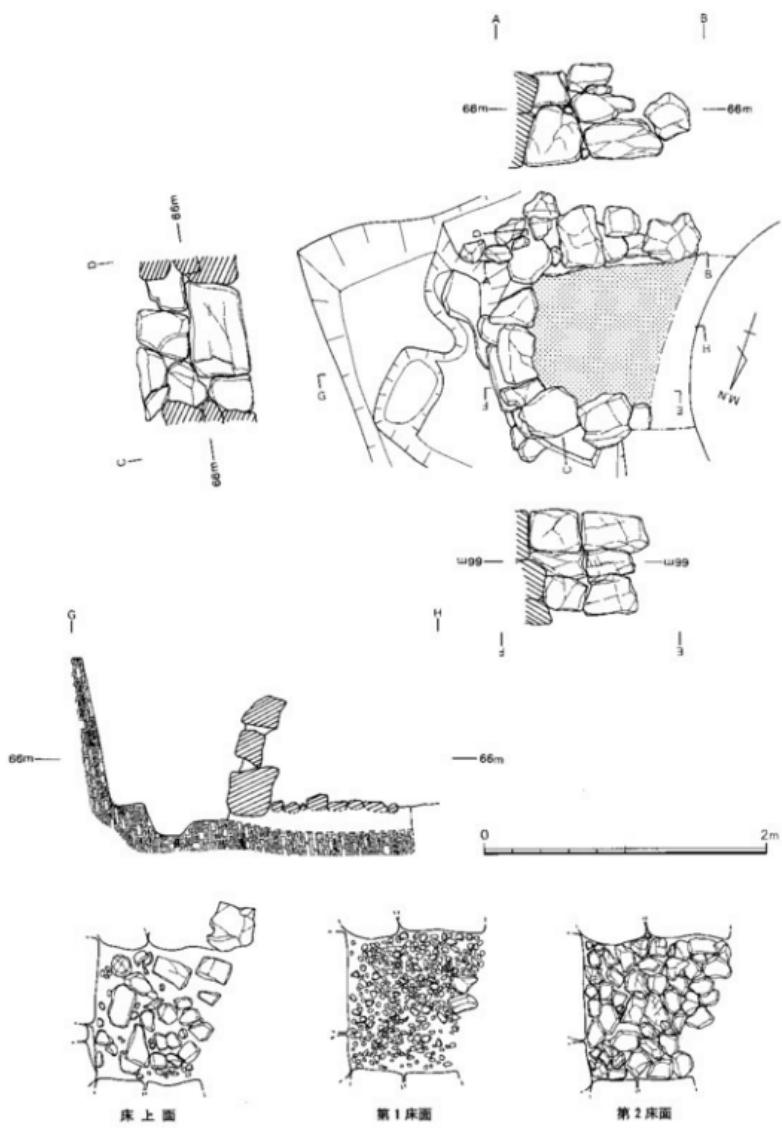
南側壁には幅40cm、高さ45cmと幅55cm、高さ28cmの2個の基底石が使用されており、奥壁側には幅30cm、高さ25cmの石材を1段積み、羨道側には高さ20cmの石材を2段に積んでいる。石積みの上面は床面から高さ70cmを測り、他の壁とはほぼ同じ高さである。2・3段目はいずれも小口積みである。南側壁も北側壁と同様にやや内傾気味に積まれており、持ち送り、あるいは石室崩壊時における石材のずれとも考えられる。石室に使用される石材は礫岩が中心である。

床面は上下2面が検出されており、さらに上面である第1床面の上部には敷石状の礫がみられ、これも床面の一部と考えれば、合計3面の床面が存在した可能性がある。この敷石状の礫は10~30cmを測る偏平礫を多く使用しており、上面は平坦面をなし、レベル的にもよくそろっている。また、礫は第一床面の玉砂利の上面に置かれており、礫間にはややしまった粘質土がつめられており、第1床面に伴う棺台として設置された敷石の可能性がある。

第1床面は、上面の敷石面から10cmほど低い面をなしており、標高65.80mを測る。床面は5cm前後の玉砂利を全面に敷きつめたものであり、厚さ3~5cmである。玉砂利は赤黄色粘質土の上面に隙間なく敷かれており、また、奥壁から約70cmの位置には20cm前後の偏平礫2個が置かれており、第1床面における棺台として使用された礫である可能性がある。

第2床面は、第1床面の下方約10cmの面で検出されており、10~20cmの偏平礫をほぼ隙間なく敷きつめている。第1床面との間には赤黄色粘質土が盛られているがしまりはあまり良くなく、第1床面の玉砂利の一部が入っていた。第2床面の敷石下には、よくしまった黄褐色粘土が敷かれており、床面とともに石室の基底石もこの粘土上に設置され、固定されている。第2床面が石室構築における当初の床面である。

石室構築における掘り方は、Aトレンチ及びBトレンチにおいてその一部が検出されており、セクション等からみると地山を約40~50cmほど掘り込んでいるようである。Aトレンチで検出された掘り方は、当初の試掘において当古墳を確認するに至ったものであり、精査の結果、奥壁の基底石に続く石材の抜き取り痕とみられる掘り込み及びそれに続く石室構築の地山の掘り方が検出された。石材の抜き取り痕とみられる掘り込みは、掘り方の北東コーナーに位置しており、長さ65cm、幅40cm、深さ25cmを測る方形を呈している。地山の掘り方は、N-86°-Wを示しており、現石室の中軸方向に比べ北へ振っており、ほぼ西へ開口する石室の存在をうかがわせるものである。この掘り方の北壁にそっては、底部から約10cm上部に10~20cmの礫による列石がみられる。石材抜き取り痕の西側には幅約40cmの張り出しを残し、現石室の奥壁基底石設置のための掘り込みへと続いている。さらに、Bトレンチ及び拡張部において検出された地山の掘り込みをAトレンチにおいて検出された掘り方に続くものとみれば、1辺約3.5mを測



第8図 石室実測図 ( $S = 1/40$ )

り、ほぼ正方形を呈する掘り方が存在すると考えられる。セクションからみれば、掘り方の埋土には地山に類似した濃黄橙色及び明黄褐色の粘質土が使われており、上層の明黄褐色土はよくしまっているが、下層の濃黄橙色土のしまりはやや悪いようである。また、Bトレンチでは、掘り方の内部に30~40cm大の礫が一部検出されており、石室構築時における掘り方内の根固めとして斜面側に石積みがなされていた可能性がある。さらに、掘り方から50cmほど外側には緩やかな地山の削り出しが検出されており、残されていた地形からみてもこの地山の削り出しが斜面部の墳丘端部を示すものではないかと考えられる。なお、石室の西部には拡張部へと延びる盛土中の石列がみられたが、石室の中軸線からはやや南へと振っている。

以上のように、石室構築の掘り方及び石材の抜き取り痕と考えられる掘り込み等からみれば、現石室の構築以前に中軸線をやや北へ振った西方へ開口する石室の構築が意図されていたものと考えられ、その後、何んらかの理由により掘り方を拡張し、やや方向を変更した現石室が構築されたものであろう。

## 2 遺物

当古墳の出土遺物はきわめて少なく、勾玉1点、土玉1点、須恵器片4点、土師器片約20点のみであった。石室内から出土したのは勾玉と土玉であり、ともに第1床面と第2床面間の赤褐色土からの出土である。石室の遺物はこの2点のみであり、残されていた奥壁側からの遺物の出土はなく、きわめて副葬品の乏しい古墳である。勾玉は全長2.3cm、全幅1.7cm、全厚0.5cmを測り、白色の主岩を使用した非常に粗い作りのものである。土玉は全長1.9cm、最大径1.2cmを測り、孔径は0.2cmである。ややソロバン玉のように中央部に最大径をもち、上下はやはり荒い面により作り出されている。

須恵器片4点はいずれも杯とみられ、2点は排水中から出土しており、図示したものと蓋片とみられる破片が拡張部から出土している。杯は口径14.5cm、器高4.2cmを測り、底部約 $\frac{1}{3}$ に右方向のヘラ削りがみられる。受部は小さく、口縁部は直立気味である。

土師器はいずれも細片であり図示できるものはなかったが、Bトレンチ及び拡張部から出土しており、拡張部出土のものは壺の頸部とみられる。

以上のように一部の調査ではあるがきわめて出土遺物は少なく、盜掘の可能性も無視はできないが、調査状況からみると自然崩壊と考えられ、副葬品は入れられなかつたようである。



第9図 出土遺物（1須恵器片、2勾玉、3土玉）

## 第4章 まとめ

藏本2号墳の調査によって検出した遺構、遺物は以上の通りである。ここでは、当古墳を中心若干の問題点を整理し、まとめにかえたい。

当古墳は、一部すでに破壊されており、かつ工事中の発見ということもあり、その全体をすべて明らかにすることはできなかったが、玄室の奥壁及び側壁の一部、2面の床面を確認することができた。また、石室構築の掘り方からは現石室に先行する石室の構築が認められ、貴重な資料を得ることができた。

古墳の規模は小さく、直径10m前後の円墳であったとみられるが、墳丘の流出があり、現地形では古墳としての確認ができなかった。この点からみれば、周辺部にもさらに多くの古墳の存在が予測され、その所在の確認が今後の課題である。石室の規模は残された部分からの推定ではあるが、全長3.5m以内、幅1mを測り、県内の他の横穴式石室に比べればやはり小規模なものといえる。構造的には羨道部及び玄門、玄室の前半部が残されていないので判断しかねるが、幅等からみれば無袖式ではないかと考えられる。床面についてはよく残されており、玉砂利と敷石の2面をもつことが確認されたが、玉砂利上面の敷石面も床面の一部として考えれば3面の床面が存在したこととなる。また、舟岩古墳群の調査結果等からみれば、玉砂利、敷石とともに奥壁側の一部にのみ存在した可能性も考えられる。石室の構築は先に述べたように現石室の中軸線に対し、北へ28°振った一辺3.5mの掘り方とそれに伴う石材の抜き取り痕とみられる掘り込みが存在するところから、当初、西へ開口する石室の構築が行われたが、何んらかの理由により再度、西南西へ開口する現石室へ造り変えられたものと考えられる。出土遺物はきわめて乏しく、当古墳の時期を明確に判断しがたいが、須恵器杯及び構造からみれば、7世紀に入るであろう。副葬品として確認できたのは、第1床面と第2床面の間から出土した勾玉と土玉各1個のみであり、両者ともに粗雑な作りであるところからみれば、元来、副葬品をほとんど伴わない古墳と考えられる。

高知県内における古墳は、消滅したものも含め167基を数えるが、その分布は南国市の68基を中心に高知市43基、土佐山田町32基であり、高知平野の北部山麓地帯及び平野部の独立丘陵にその大半が集中している。また、平田曾我山古墳、高岡山古墳群、狹間古墳、大塚古墳を除けばすべて横穴式石室を有する後期古墳である。特に舟岩古墳群は26基からなる高知最大の群集墳であり、高知平野をひかえての生産力がこれらの群集墳成立の基盤となつたのであろう。藏本2号墳も、岡豊地区に所在する他の藏本1号墳、米内古墳、岡豊城跡古墳、さらには本古墳の位置する斜面部に存在が予測される古墳が確認されれば、眼下に広がる岡豊地区を基盤とする群集墳を形成するものといえる。

宿毛市	2	南国市	68
中村市	3	土佐山田町	32
大方町	1	野市町	4
須崎市	1	香我美町	3
伊野町	3	夜須町	2
土佐市	3	安芸市	1
高知市	43	安田町	1

第2表 県内古墳一覧表

当古墳の埋葬に関しては、2面の床面をもつところから2回以上の追葬が行われたと考えられるが、副葬品の乏しさから時期的には明確にしがたい。勾玉及び土玉は、第1床面をなす玉砂利の下部の黄褐色土中から出土しているところから、当初の第2床面に伴うものと考えられ、他の副葬品は第1床面を新たに造成する時点では羨道部側もしくは石室外へ処理された可能性がある。

以上、内容的には資料が乏しいため不明な点が多いが、岡豊地区における古墳の新発見という意義においては、舟岩古墳群を中心とする周辺部の群集墳の状況を解明する一步となると考えられ、さらに、資料の増加を期して今後の古墳研究の一助としたい。

- 註1 廣田典夫「土佐の古墳」『高知の研究』1 1983年 全長約60mの前方後円墳であり、獸首鏡、獸形鏡の2面の鏡、鉄鋤、鉄刀を出土しているが、内部構造などについては不明な点が多い。
- 註2 高知県教育委員会『高岡山古墳群発掘調査報告書』 1985年 直径18mを測る円墳2基が検出されており、ともに内部主体は礫層である。1号墳からは筒形銅器、青銅製小棒、鉄刀、勾玉、管玉が出土しており、2号墳からは内行花文明光鏡、石劍、勾玉、管玉、小玉が出土している。
- 註3 南国市『南国市史』上巻 1979年 直径約12mを測る円墳であり、埋葬主体は木棺直葬であり、3基検出されている。出土遺物は土師器のみである。
- 註4 土佐山田町教育委員会『土佐山田町史』 1979年 全長40~45mの前方後円墳であり、内部主体は竪穴式石室である。副葬品としては多量の須恵器、金銅製杏葉、玉類、鉄刀子、鉄鎌が出土している。

# 写真図版



遠 景（南より）



遠 景（南東より）

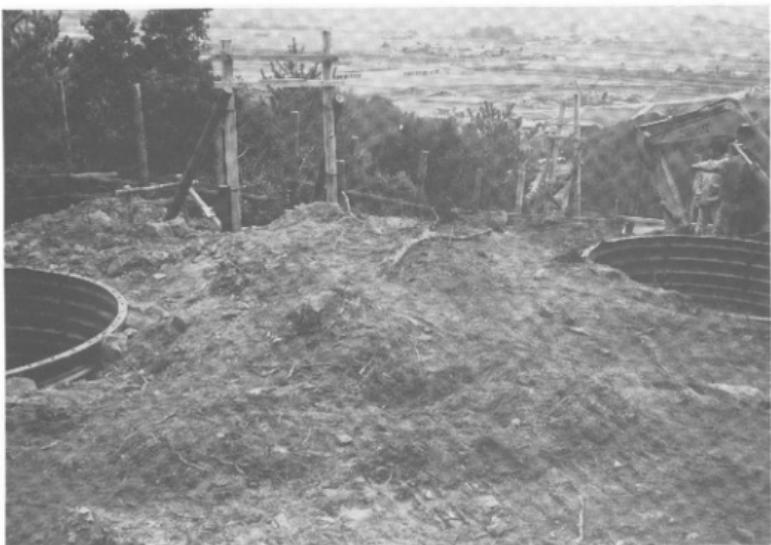
図版 2



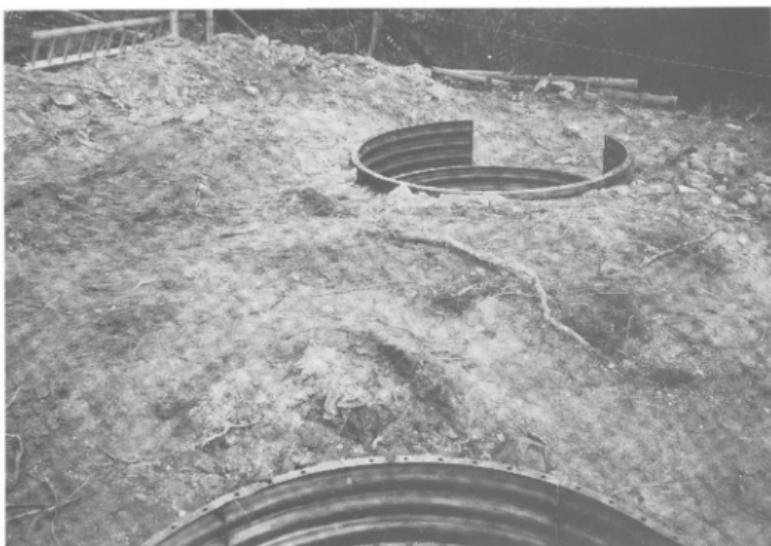
近 景 (南より)



古墳からの遠景 (北より)



調査前全景（北より）

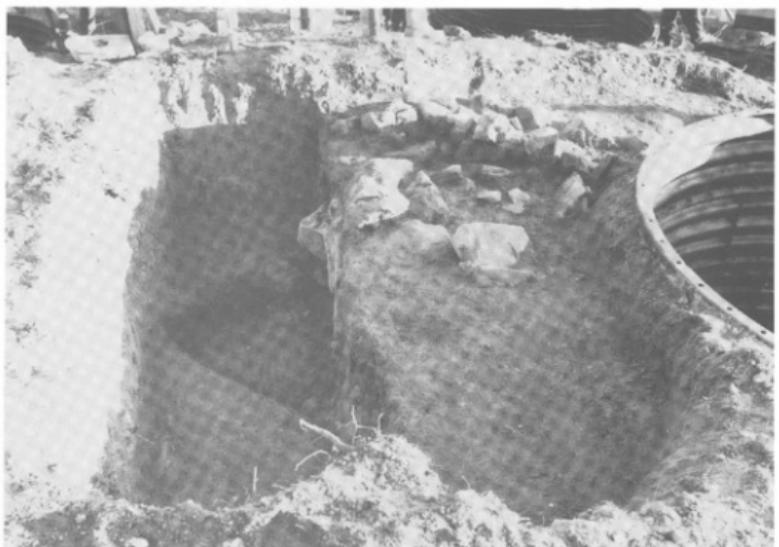


調査前全景（西より）

図版 4



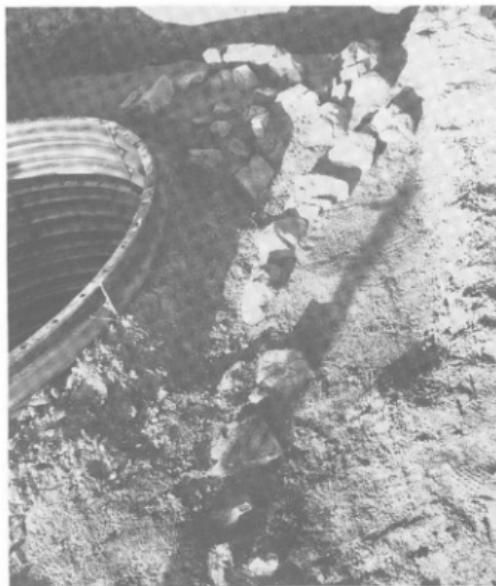
A トレンチ古墳検出状態



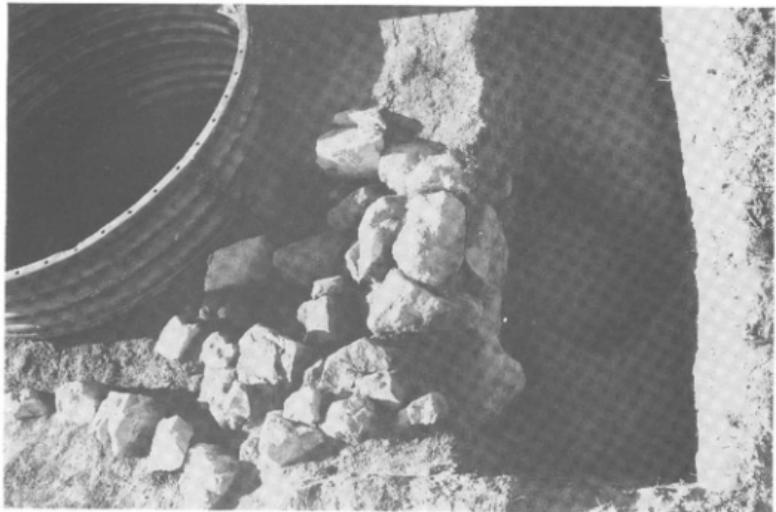
石室上面検出状態



奥壁裏面検出状態



石室上面検出状態



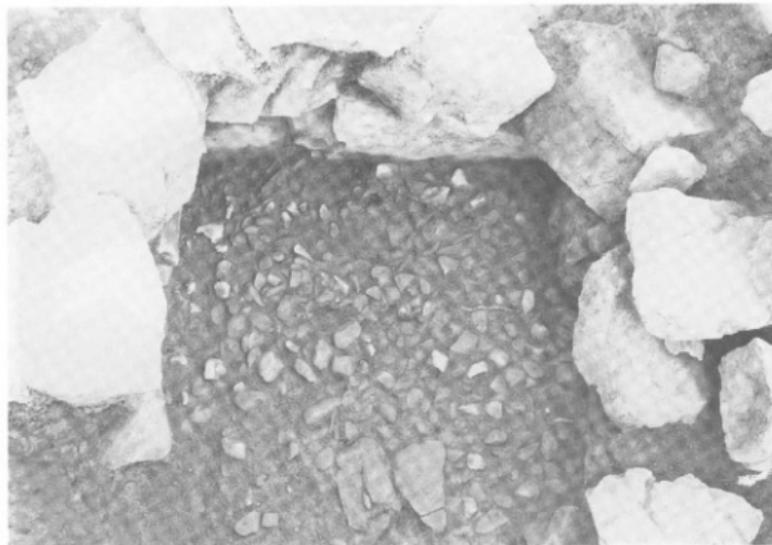
石室検出状態（南より）



石室検出状態（西より）



床面上面



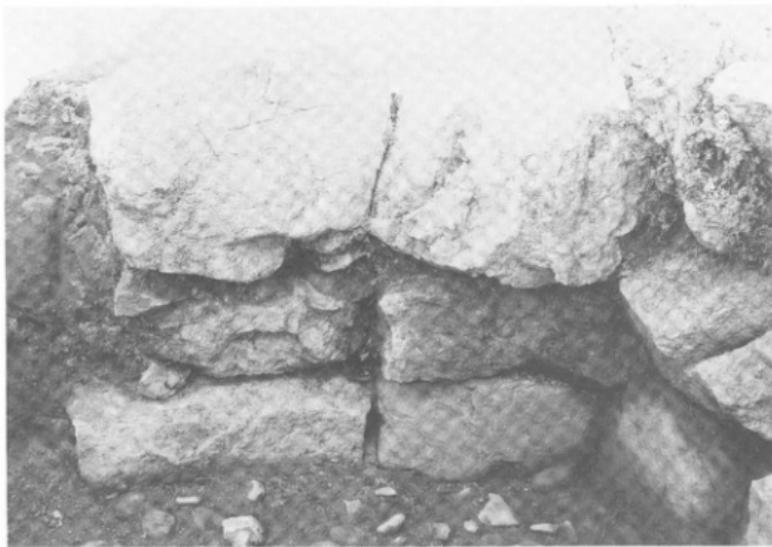
第1床面



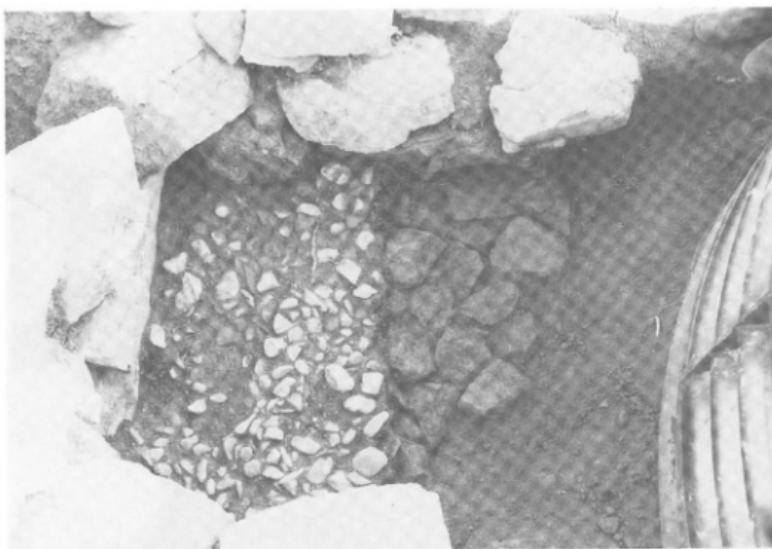
奥壁



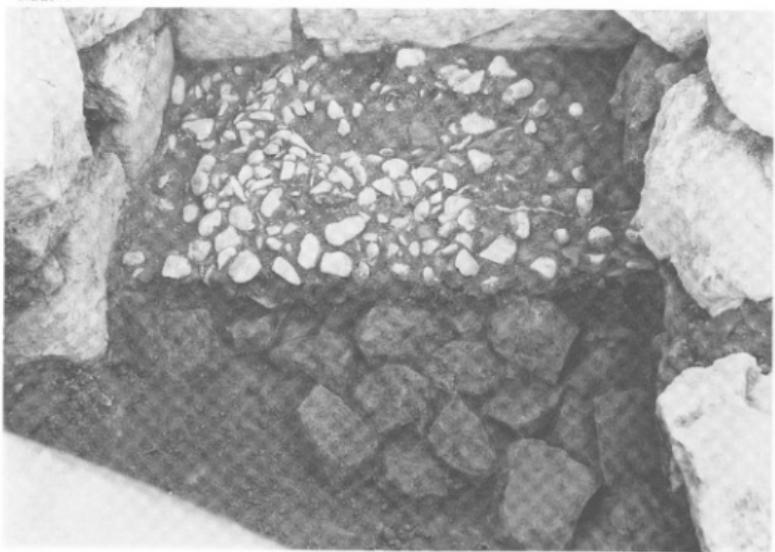
南側壁



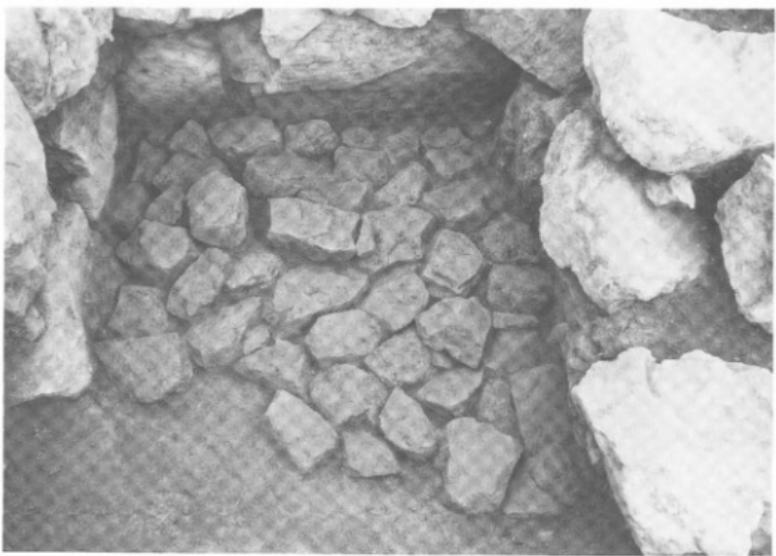
北側壁



第1床面 断割



第1床面 断割



第2床面



奥壁



南側壁



北側壁



完掘状態（北西より）



穴掘状態（南東より）



石室穴掘状態（北西より）

図版14



石室掘方及び石材抜取痕



試掘トレンチ東壁セクション



北側壁 掘方



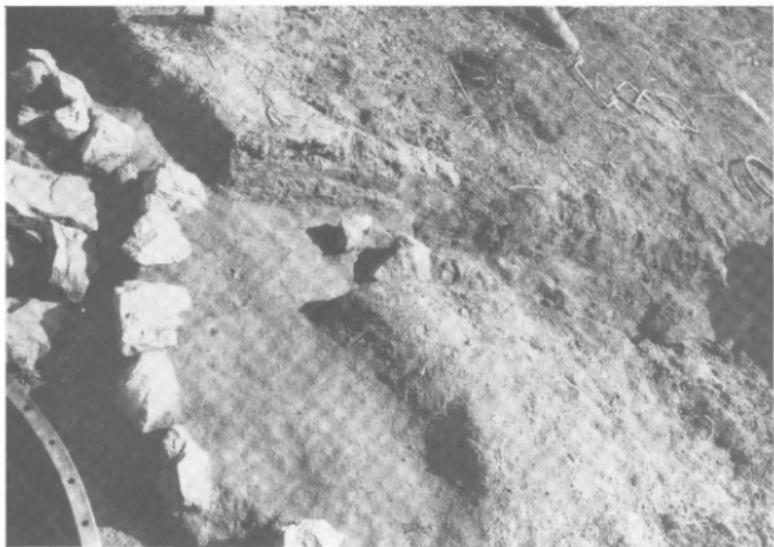
北側壁 掘方セクション



墳丘西部 断面



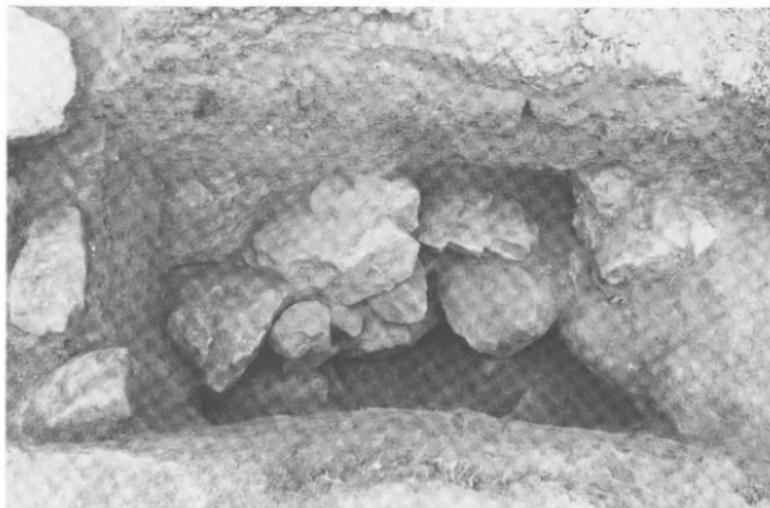
墳丘西部 土師器出土状態



墳丘南部 B トレンチ



墳丘南部 B トレンチ東壁セクション



B トレンチ石積



B トレンチ掘方



砂による埋戻し（北より）



砂による埋戻し（南より）

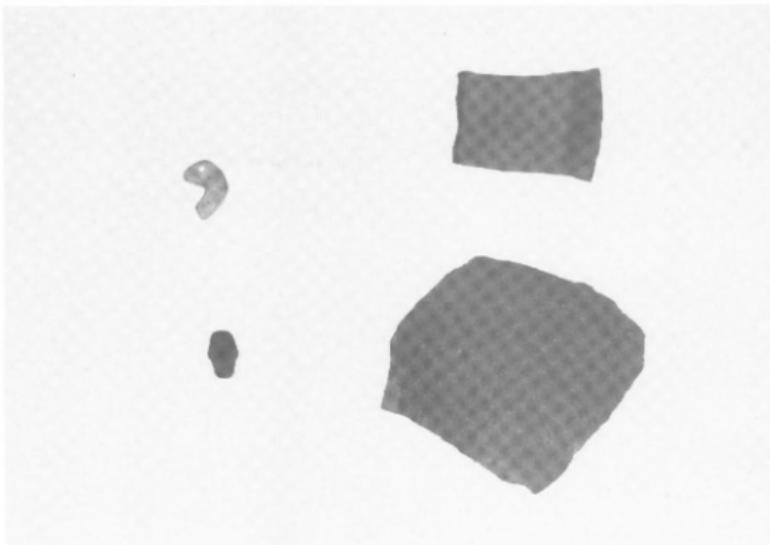
図版20



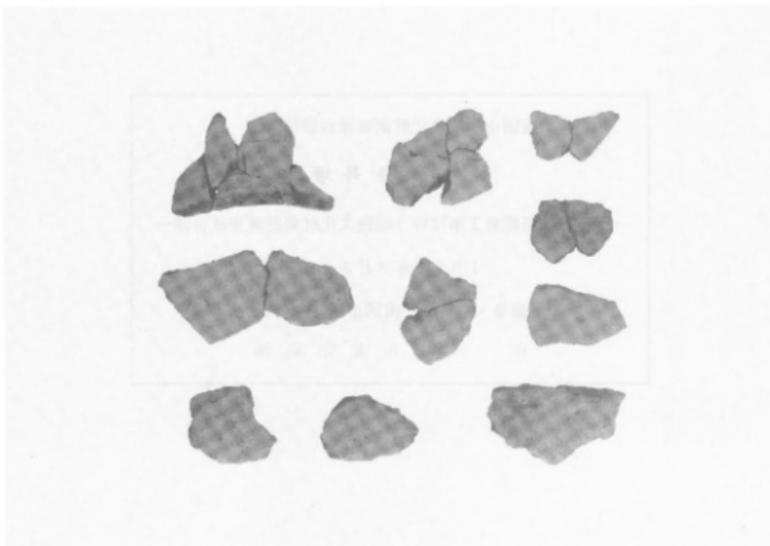
調査風景



調査風景



出土遺物（勾玉・土玉・須恵器片）



出土遺物（土器片）

南国市埋蔵文化財調査報告書第8集

**藏本2号墳**

—送電線鉄塔建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1989年3月31日

編集・発行 南国市教育委員会

印 刷 川 北 印 刷 社